

露地と施設を組み合わせる規模拡大 ～経営資源の効率的な活用を目指して～

海部郡飛島村 平野和実さん(平野園芸)
施設花き(鉢花)

【平成 25 年 5 月 20 日掲載】

海部郡飛島村でポインセチアやミニバラなどの鉢花を生産する平野和実さんをご紹介します。平野さんは、新品目の栽培技術の確立や省力化技術の積極的な導入により収益性の高い鉢花生産を実践するだけでなく、その技術を惜しみなく地域に還元しています。また、海部苗木花卉生産組合連合会の会長や愛知県花き温室園芸組合連合会（以下、花き連）の副会長を長年勤め、地域や県の花き生産の振興及び消費拡大の取組に尽力されています。

切り花から鉢花へ

平野家では、かつて水田を利用した夏ギクの半促成栽培を行なっていました。しかし、泥だらけになっての収穫作業や夜遅くまで続く出荷調整作業に限界を感じ、高校在学中に施設を用いた鉢花栽培への転換を決意します。

高校卒業後に、旧渥美町（現田原市）の鉢花農家で一年間研修を積んだ後、昭和 49 年にポットマムの栽培を開始します。就農当初より所属している蟹江町鉢物部会では、組織活動が活発であったことから栽培技術だけでなく、経営管理や組織活動に至るまで農業経営のすべてを学ぶことができたそうです。



出荷間際のプリンセチア®と平野和実さん（中）
照美さん（右）、後継者の修司さん（左）

新規品目への挑戦

ポットマムの栽培から経営を開始した平野さんですが、ポインセチア、ミニバラ、カーネーション、スプレーマムなど新規品目にも積極的に取り組みました。特に現在の主力品目となっているポインセチアでは、商品となる鉢に直接挿し木を行う栽培技術を確認しました。これにより以前は育苗パッドで発根させてから鉢に移植していた工程がなくなり、大幅な省力化と栽培期間の短縮が実現します。また、本技術の確立により春期に若干の余裕が生まれたため、平成 10 年には春以降に出荷するミニバラの栽培を開始しました。



施設に設置されたエブ&フロー給
水装置

ミニバラの導入にも表れているように、平野さんは時間と空間を有効に活用することも日頃から意識しており、ほ場や施設内にもその一端が伺えます。ハウスや園内道はフォークリフトなどの輸送機械で作業しやすいように配置されており、すべての施設に設置されたエブ&フロー給水装置は、かん水時間の大幅な削減を可能にしています。

露地と施設の組み合わせ

平野さんの経営では露地ほ場を十二分に活用しているのも大きな特徴です。ポットマムの栽培を始めた頃から露地ほ場を活用していましたが、ミニバラでもその休眠性を生かして、冬季に一定期間露地で育てることで開花調節と株の充実を図っています。この栽培体系では主力であるポインセチアの出荷後に、ミニバラを施設に入室できることから出荷鉢数の大幅な増加が可能となりました。

平野さんは、更なる露地の有効活用を目指して、平成 17 年には耐寒性のあるエレモフィラの栽培に取り組みました。エレモフィラもポインセチア同様、挿し木によって増やしますが、その栽培特性が知られておらず、初年度は活着率も 1 割程度と採算の取れる品目ではありませんでした。しかし、ポインセチアで培った技術や挿し木の時期などを検討した結果、活着率は飛躍的に向上し、現在ではポインセチア、ミニバラに続く主力品目となっています。



露地のエブ&フロー給水装置（上）
スプリンクラー装置（下）

生産者の繋がりと新品目の導入

「生産者同士の繋がりが大切」と平野さんが語るように、自らが顧問を務める蟹江町鉢物部会では、個選個販体制となった現在でも月一回のは場巡回を続けています。そこでは、お互いの技術や情報の共有が図られているだけでなく、苗が不足した時などの問題が起こった際には、融通しあう体制がとられています。

平野さんは地域だけに限らず広域的な繋がりも大切にしており、自らの研修先や過去に受け入れた研修生、さらに花き卸売市場が事務局を務める生産者グループの役員等、その交流は全国に広がっています。また、花き生産者団体である愛知県花き連の副会長を長年にわたって務めており、県内花き生産振興事業や生産者間の情報共有を図っています。



挿し木後のエレモフィラ

花きの生産振興について

今でこそ「花育」という言葉は一般的になりつつありますが、平野さんは 20 年以上前から新たな需要喚起の必要性を訴えてきました。特に小学校での体験学習や「海南子どもの国」でも続く寄せ植え講習会では、花材を自費で調達して未来の消費者育成に取り組んできました。今年度からは「花の王国あいち県民運動実行委員会」の支援を受けて、関係機関への花の展示や小学校での花育教室を開催しています。



母の日向けの
ミニバラ

最後に将来の夢を伺ったところ、「リニア中央新幹線の開通に合わせて“花の万博”を開催し、世界中の人達に花の王国あいちを知ってもらいたい。」と力強く語ってくれました。

執筆：農業経営課
取材協力：海部農林水産事務所
農業改良普及課